

# 京都方言の複合動詞における重子音化と 口蓋化・口唇化の考察<sup>1</sup>

吉田優子

キーワード：京都方言、重子音、高母音と口蓋化・口唇化、複合動詞、強調

## 1. はじめに

京都方言に見られる特徴的な重子音の起こる過程を解明するため、動詞の進行相において、重子音化と同時に起こる口蓋化・口唇化の観察を進める。重子音は京都方言の語彙一般にみられ、名詞、そして動詞進行相などに頻発する。京都方言では他の日本語変種にはあまり見られない、有声子音の重子音化も起こる。重子音化と口蓋化・口唇化の共起関係について考察し、また強調表現に起因するという分析である。ここで京都方言というのは京都市祇園周辺の大正、昭和前半生まれの花街関係者ではない一般人話者による方言を意味する。重子音化現象も他の現象と同様に昭和30年台、あるいは1950年台生まれの世代辺りから大阪方言や共通語の影響により21世紀になり、ほぼ消滅しつつある。

2節では本稿で取り扱う京都方言における重子音の特徴をここで扱う動詞進行相が複合動詞として扱われることと併せて説明する。3節には本稿の分析の行われる理論的枠組みについて、統率音韻論 CV モデルを説明し、この枠組みでも重要な役割を果たす3エレメント |A| Ⅱ |U| について、特に口蓋化にも貢献する Ⅱ エレメントを中心に論ずる。4節では京都方言の高母音 /i/ が口蓋化することには Ⅱ エレメントが関与することに焦点を当てながら複合動詞におけるピッチ型を紹介し、そのピッチ型から本稿で扱う重子音形には強調の CV が関与することを提案する。5節は京都方言の名詞を含む他の重子音環境と、もう一つの高母音 /u/ も同様に口唇化という形で重子音化に関与する |U| エレメントであることを示し分析する。

---

『コミュニカール』11 (2022) 25-52

©2022 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

## 2. 問題点—京都方言の重子音の特徴と口蓋化との関連

問題となる重子音化と口蓋化に焦点を当てるために、まず、この現象の起こる京都方言特有の複合動詞について説明する。以下、データにおいて音素表記は / / で、音声表記は International Phonetic Alphabet (IPA) を用い、[ ] で表記する。

### 2.1. 京都方言の動詞複合体とアスペクト—進行相と完了相

関西方言は、地域ごとに少しずつ異なる進行相と完了相の区別を取る。京都方言の場合、1) 「-ておる」から転じた「-とおる」は状態を表す完了相で、動作・変化の「結果」を示し (1a)、2) 「-いおる」から転じた「-よる」は「動作・変化の直前」(1b)、もしくは「継続」(1c) を表わす進行相である (奥村 1962)。歴史的には「-よる」の初出は1794年の『北華通情』であると指摘されている (金水 2006)。どちらも待遇表現的には下向きの待遇 (1a,b,c) であり、主に男性話者の表現ではあるが、女性にも生き物や年下の家族等の状態を表すときには使用され、ときに愛情表現が込められる (1d) こともある。

(1) a. ゴールマエ ヤノニ コケトール

「ゴール前なのに 転倒してしまっている」

b. アノコー ケツマヅイテ コケヨル デ

「あの子が つまづいて (今に) ころぶよ」

c. ヨー フリヨル ナー

「(雨が) よく 降っている / 降る なあ」

d. ヨーケ タベヨル ワ

「たくさん 食べるなあ」

この例の進行相 (1b,c,d) は普通か速めの発話においては重子音化、口蓋化が起こる。本稿ではこの重子音化、口蓋化の起こる、接近音 /j/ が先頭部に来る「-よる」のほうに焦点を当てて考察を進める。

## 2.2. 複合動詞と複合要素

複合動詞の「動詞 1+ 動詞 2」型は動詞 1 の連用形に動詞 2 が補助動詞として付き、時間的なアスペクトや社会的アスペクトを表す（影山 2013）ので、動詞表現「-よる」は進行相（1b&c）、社会的上下関係のアスペクトを表すなどの属性からも、複合動詞と見做すことができる。

連用形は五段活用においては、「降りよる」（1c）に見るように語幹末子音に母音 /i/ が続く。（2a&c）も複合動詞の例であり、連用形の動詞 1 に語頭に /j/ を持つ動詞 2 が付く。連用形 + 助動詞「-やす」（2b）、命令形「-よし」（2c）も同様の環境、/i/-/j/ の連鎖ができる。そこには進行相と同様、重子音化と口蓋音化が起こる。

### (2) a. 動詞連用形-よる（進行相）

ハヨー ハシリヨンナア ～ ハシッリヨンナア 「速く 走るなあ」

### b. お-動詞連用形-やす（敬語助動詞）

ホナ オイキヤス ～ オイッキヤス 「では お行きください」

### c. 動詞連用形-よし（命令）

ハヨ カキヨシ ～ カッキヨシ 「早く 書きなさい」

チント ノミヨシ ～ ノンミヨシ 「ちゃんと 飲みなさい」

さて、活用形と動詞 1 と動詞 2 の連結部に注目する。「走る」/hasir-/ の活用の例（3）を見ると、語幹末子音 /-r/ に後続する母音は活用形により様々で、連用形では /i/ である。この /i/ は、連用形に特有であり、動詞語幹の語彙に指定されたものではないことが確認できる。

(3) a. 意向形 走ろう /hasir -oo/ → [haçiro:]

b. 連用形 走りたい /hasir -itai/ → [haçiritai]

c. 否定形 走らん /hasir -aN/ → [haçiraũ]

d. 命令形 走れ /hasir -e/ → [haçire]

e. 終止形 走る /hasir -u/ → [haçiru]

複合動詞の動詞1は連用形であると考えられる場合にも、子音を末尾に持つ語幹の後に /i/ という複合要素 (compounditive element) (McCawley 1968) が付随すると考える場合も、この /i/ は動詞語幹から独立した要素であるといえる。歴史的には「居おる」の「い」ではないかと思われるが、共時的には動詞複合形の連結要素となっている。連用形とは動詞語幹に用言が続く形であり、用言とは自立語のうち活用があり、単独で述語になり得るもの、すなわち動詞、形容詞である。助動詞が続くこともある。連用形である複合前部要素、すなわち動詞1と後続する用言が複合語を形成するというのが前提での活用形である。本稿では連用形末尾の「い」はこの観点から複合要素とし、活用形としては連用形と呼ぶ。

さて、現れる重子音の特徴を記しておく。動詞語幹末尾の重子音は、京都方言ではこの動詞語幹末尾の子音が有聲子音でも起こる。共通語をはじめ、ほかの日本語変種では重子音は普通、無聲子音に観察される。被験者の世代の京都方言では鼻音 [ŋ] となる有聲軟口蓋閉鎖音 (現在の京都市内の方言では鼻音ではない [g] である) も重子音化することがあり、弾き音 [r] の重子音化も起こる (2a)。複合動詞 (2a) は動詞1「走る」の語幹 /hacir-/ に複合要素の「-い-」を挟んで動詞2の「おる」が続く。この /i-oru/<sup>2</sup> の並びが通時的に形を変え「よる」/ -joru/ となったものが後続することによって [hacirijoru ~ hacir<sup>ɹ</sup>joru] という形になる。語頭のほうから現象を記述すると：1) 動詞1 /hacir-/ の末尾子音 /r/ が重子音化し、2) 複合要素 /-i-/ において、もともと母音である /i/ が「弱化」または「消失」し、3) 重子音化した動詞1末尾の /r/ が拗音となり、口蓋化した [r<sup>ɹ</sup>] か [ɾ] に近い音となる。この過程における母音の消失・弱化、そして口蓋化と共起する重子音化を説明するのが本稿の目的である。

### 2.3. 複合動詞における重子音と拗音

本稿では、祇園周辺 (京都市東山区四條繩手下がる (四條通より南)) に生まれ育った1914年生まれの女性話者と祇園周辺 (京都市東山区四條繩手上がる (四條通より北)) に生まれ育った1926年生まれの男性話者の発話データに基づいて分析する。以下に示すデータはYoshida (1989) から引用した

ものとその後の調査で収集したものである。

複合動詞の重子音化については、口蓋化と共起関係がある。すなわち前部要素末尾の前舌高母音 /i/ と後続する CV との融合により渡り音 /j/ が生じて先行する子音を口蓋化する過程と、促音化が形態素境界を越えてみられる。硬口蓋接近音が動詞 1 語幹末尾の子音と拗音を形成し、重子音化する。複合動詞の動詞 1 が子音語幹動詞の場合、(4) に示すように i) 口蓋化も重子音化もなし、と ii) 口蓋化と重子音化あり、の異形を持つ。語幹末尾が /e/ のもの (6) にはどちらの異形もない。

例えば /tjo/ と /sjo/ の場合は、共通語や他の日本語変種で聞かれる拗音に非常に近いながらも、「かっしよる」[kacc<sup>j</sup>ʃoru] や「もちよる」が転じてできる「もっちよる」の [mottc<sup>j</sup>ʃoru] は西日本の例えば山口方言などで聞かれる完了相、「持っておる」から転じる ((すでに) 持っている) の「もっちよる」[mottc<sup>o</sup>ʃoru] のような拗音拍「ちよ」ではない。もちろんこの山口の拗音拍も口蓋化によるものだが、この拗音とは区別して京都方言における口蓋化と呼び、硬口蓋化の補助記号 [ʃ] をつけて表記する。なお、「いぬ」(4h) は京都方言において「帰る」の意である。

(4) 動詞 1 語幹	意味	i) 重子音化なし	ii) 重子音化あり	許容される異形
a. /k/ kak -	(書く)	[kakiʃoru]	[kakk <sup>j</sup> ʃoru]	~ [kakkʃoru]
b. /ɲ/ sinonɔ -	(凌ぐ)	[cinonɲiʃoru]	[cinonɲ <sup>j</sup> ʃoru]	~ [cinonɲʃoru]
c. /b/ job -	(呼ぶ)	[jobiʃoru]	[jobb <sup>j</sup> ʃoru]	~ [jobbʃoru]
d. /t/ mot -	(持つ)	[motciʃoru]	[mottc <sup>j</sup> ʃoru]	n/a
e. /s/ das -	(出す)	[dacc <sup>j</sup> ʃoru]	[dacc <sup>j</sup> ʃoru]	~ [dacc <sup>o</sup> ʃoru]
	toos - (通す)	[to:ciʃoru]	[to: cc <sup>j</sup> ʃoru]	~ [to: cc <sup>o</sup> ʃoru]
f. /r/ kir -	(切る)	[kiriʃoru]	[kirr <sup>j</sup> ʃoru]	~ [kirʃoru]
	hair - (走る)	[haçiriʃoru]	[haçirr <sup>j</sup> ʃoru]	~ [haçirrʃoru]
	koor - (凍る)	[ko:riʃoru]	[ko:rr <sup>j</sup> ʃoru]	~ [ko:rrʃoru]
g. /m/ jom -	(読む)	[jomijoru]	[jomm <sup>j</sup> ʃoru]	~ [jommʃoru]
h. /n/ in -	(いぬ)	[inijoru]	[inn <sup>j</sup> ʃoru]	~ [innʃoru]

## (5) 動詞1 語幹末が母音 /i/

- a. mi - (見る) [mijoru] ~ [mjo:ru]  
 b. otɕi - (落ちる) [otɕijoru] \* [otɕo:ru] [otɕeʝoru]

## (6) 動詞1 語幹末が母音 /e/

- a. ne - (寝る) [nejoru] \* [njo:ru]  
 b. tabe - (食べる) [tabejoru] \* [tabjo:ru] \* [tabbjo:ru]

動詞1の語幹末が母音の例(5)と(6)について、(5a) & (6a)も語幹が1モーラの例であるものの、(5a)で起こる口蓋化が(6a)では起こらない。語幹末尾母音が/i/の場合(5a)はこの/i/が消失、頭子音が口蓋化/mj/し、さらに動詞2の母音/oru/に長音化が起こり/oru:/、[mjo:ru]の形となる。動詞1末尾が母音/e/の場合は「-よる」の形(6a&b)に重子音化も口蓋化も見られない。「見よる」には「みよおる」という形の口蓋化、後部要素の長音化が起こるバリエーションがある。「来よる~きよおる」、「しよる~しよおる」と同様、重子音化を起こさない例であり、動詞1の語幹末尾が子音/r/のもの、「切る」(4f)とはバリエーションのあり方が異なることに注目したい。「落ちる」(5b)に関しては母音語幹動詞でありながら、進行相において重子音化が起こる。

次に(7)と(8)で命令形「-よし」[-joci]の例を見てみる。こちらは主に女性話者に使われ、もう少し若い世代にまで使用が認められる。語源は「お-し」、丁寧の「お」に「する」の連用形であり、昭和の初期から「よし」となった(中井1997a)。これも「動詞+よる」と同様、複合動詞である。

- (7) a. [kakijoci] ~ [kakkʲjoci] (書きなさい)  
 b. [cinonijoci] ~ [cinonɲʲjoci] (凌ぎなさい)  
 c. [jobijoci] ~ [jobbʲjoci] (呼びなさい)  
 d. [motɕijoci] ~ [motteʝjoci] (持ちなさい)  
 e. [daciјoci] ~ [daccʲjoci] (出しなさい)  
 f. [hacirijoci] ~ [hacirrʲjoci] (走りなさい)

- g. [jomijoci] ~ [jomm<sup>h</sup>joci] (読みなさい)  
 h. [inijoci] ~ [inn<sup>h</sup>joci] (いになさい‘帰りなさい’)
- (8) a. [mijoci] ~ [mjo: ci] (見なさい)  
 b. [otcijoci] ~ [ottɕ<sup>h</sup>joci] \* [otɕo: ci] (落ちなさい)  
 c. [nejoci] \* [njo: ci] (寝なさい)  
 d. [tabejoci] \* [tabbjo: ci] \* [tabjo: ci] (食べなさい)

(7) と (8) に見るように「-よし」表現においても「-よる」と同様に重子音化と口蓋化が起こる。例外は、「-よる」の場合と同様、語幹末が母音 /i/ の場合である。語幹が1モーラの例 (8a&c) で対照的なのは語幹末の母音が /i/ の場合 (8a) はこの /i/ が消失、頭子音に口蓋化し (/mj<sup>h</sup>/)、さらに /o<sup>h</sup>ci/ 部の /o/ に長音化が起こり /o: ci/、結果、「みよおし」 [mjo: ci] となる。前部要素語幹末が母音 /e/ のものは重子音化、口蓋化は起こっていない。

#### 2.4. 重子音形と非重子音形

母音 /i/ が「消失」する過程について考えてみる。まず、重子音化+口蓋化の起こる形を重子音形と呼び、非重子音形と何が違うのか、使い方を検討する。話者の話し方の傾向にもより、必ず重子音化を起こす話者もいるのだが、たいていにおいて感情がこもった場合に重子音化する。著者も就学前には母語話者としてこの形を使っていたが発話というよりは、命令形であることから年齢の関係で大人から聞かせられるほうが圧倒的に多かった。当時の文化では危険な状況などにおいて子供たちは保護者に限らず近所のどの大人からも叱られるものであったが、特に子供を叱る脈絡において大正、昭和初期生まれの大人が頻発していた形である。「-よる」表現は主に男性話者のほうが頻繁に使い、「-よし」命令形は女性が主に使う表現であり、令和の時代にも高齢層はよく使う。これを前後に共起する表現から検討する。

#### (9) a. 「-よる」進行相の強調形

ソノコー、ミズ、コボッシュオル デ!

(その子が(今に)水をこぼすよ!)

(kobos-i-oru)

ヨー、ソシナ ウソ、ツッキョシナア!

(よくもまあ、そんな嘘をつけるもんだ!)

(tsuk-i-oru)

ヨー、コンナ ケツタイナ モシ、ツクツリヨル ワ!

(よくもまあ、こんな妙なものを作るもんだ!)

(tsukur-i-oru)

b. 「-よし」命令の強調形

ジブンデ モッチョシ! (自分で 持ちなさい!)

(/mot-i-osi/ [mottɕjoci])

ハヨ、ダッショシ! (はやく 出しなさい)

(/das-i-osi/ [daccjoci])

ヤメトッキョシ! ((感情的に) やめておきなさい!)

(/yame-te-ok-i-osi/ [jametokkjoci])

cf. ヤッパリ、ヤメトキョシ。

((冷静に) やはり、やめておきなさい)

「よう」(副詞)が伴うこと、そして「あんな、こんな、そんな」(連体詞)によって強調された名詞について話すことが普通である。「-よし」に関しては、命令、指示文をつくるので、特に禁止の意味を持つときには重子音形が使われる。強調表現の形成として重子音形が現れるので、日本語オノマトペにおける強調語形成で論じられている、「促音・撥音が強調のマーカーとして語中に挿入される(那須 2004)」のと同様の「マーカー」が挿入されていることが考えられる。那須(2004)では強調形は様々な韻律的な条件に基づいて、ベース(基体)に韻律接中辞であるモーラが挿入される(Ito 1986, Hayes 1989)という分析を提唱している。本稿ではこの「マーカー」とは何か、京都方言複合動詞形の形態論でも同様のことが言えるのか考察する。

前舌高母音 /i/ と硬口蓋接近音 /j/ は統率音韻論(Kaye, Lowenstamm & Vergnaud 1985, 1990)で提唱されたエレメントの性質を受け継いでいる CV



モデル (Lowenstamm 1996, 2000, Scheer 2004, 2012) では、同一エレメントの  $\text{[I]}$  がそれぞれ  $\text{V}$  と  $\text{C}$  に連結した音声解釈である。スケルトン層 (CV)、そしてスケルトン層からは独立した分節音レベル (メロディー層) での隣接関係から音声解釈を導き出す。複合動詞において、前部要素と後部要素の間に複合要素  $/i/$  が介入する中で、後部要素の前に  $/j/$  が「作られる」のが本稿で取り上げている口蓋化であることを想定して分析を進めてゆく。

### 3. 理論的枠組み

#### 3.1. エレメント理論

京都方言における重子音化を統率音韻論 (Kaye, Lowenstamm & Vergnaud 1985, 1990) のエレメント理論 (Harris & Lindsey 1995, Charette & Göksel 1996) に必要に応じて CV モデル (Lowenstamm 1996, 2000, Scheer 2004, 2012) の枠組を用いて分析する。CV モデルではすべての言語において普遍的に、すべてのいわゆる「音節」は必ず CV の構造を持つことを前提とするので、Empty Category (空の範疇) が  $\text{C}$  にも  $\text{V}$  にも存在する。CV の配列のみを問うことで、ほかの構成素、すなわち、音節、拍、韻脚などの構成素は排除している。本節では空の  $\text{V}$  の概念を想定し、エレメントの説明をする。CV 層 (スケルトン) とエレメントの並ぶメロディー層はお互い独立していて、この CV 配列とエレメントの結びつきによって様々な現象が起こり、本稿の口蓋化、口唇化は、スケルトン層とメロディー層の独立性を検証する典型的な例といえることができる。

CV モデルにおいて各言語の母音は普遍的な音韻エレメント、 $|\text{A}|$  (non-high)、 $|\text{I}|$  (front/palatal)、 $|\text{U}|$  (labial/round) の 3 エレメントから構成される。これらのエレメントは Harris & Lindsey (1995) に定義されるように普遍的で認知的 (cognitive) な単位であり、単一の音韻的価値のみ (mono-valent) を所有する。分節音はエレメント理論では音韻表現 (Phonological Expression) と呼ぶ。エレメントが二値的素性と大きく異なるのはエレメントが音韻表現内に存在するかないかによって、その音韻表現の持つ性質が決まる。すなわち音韻表現中にどのエレメントが含有されるかどうか問われることである。

日本語の 5 母音も他の言語と同様、この 3 エレメントから構成される。エ

レメント |A|、|I|、|U| はそれぞれの単体での音韻表現として /a/、/i/、/u/ と音声表現される。日本語の複合的な音韻表現は 2 つ、/e/ は |A| と |I|、/o/ は |A| と |U| の組み合わせから成り、この組み合わせで問われるのは言語もしくは変種における固有のパラメータ設定である。京都方言では |A| と |U| が主部性を持つエレメントであり、エレメントの組み合わせから成る音韻表現内でも認可主となることができる (Yoshida 2009)。日本語共通語には異なるパラメータ設定が必要だが (Yoshida 2009)、|A| は共通して、生来的に認可主である (Yoshida 2009, 2013)。このパラメータは言語ごとに設定が必要となる。例えば、英語などの /e/ と /æ/ を持つ言語では、どちらも |I| と |A| の複合的音韻表現で異形体 (isomer) であり、/e/ では |I| が、/æ/ では |A| が主部となる。

単体で音韻表現となる場合 |A| (/a/)、|I| (/i/)、|U| (/u/) と複合的に音韻表現となる場合は |I · A| (/e/)、|U · A| (/o/) で、単体でも複合でも日本語では |A| は必ず主部性を持つ。主部性を持つエレメントは主部層に投射されている (Ulfsbjorninn 2021, Yoshida 2019) ので、主部性は補助記号を使わずに投射レベルの違いで表し、通常は下線を引くなどの補助記号では表さないが、ここでは便宜上、下線で示すこととする。

一方、音声表現の連結する V スロット間の統率関係を決めるのは、エレメントの主部性と音声表現の複雑性 (complexity) による (Harris & Linsey 1995, Cyran 2010)。日本語においても |A| はナチュラル・ヘッドであり、/a/ の日本語における生起率が最も高く、韻律層において他の V を認可すると考えられるアクセント核が /a/ に起こる確率も高い (Yoshida 2009)。CVCV の構造を持つ和語 513 語には V は 1,026 あるうち、約 1/3 にあたる 331 を /a/ が占めていて、このうち、42% にあたる 139 語において語彙アクセントが母音 /a/ にある (Yoshida 2009)。

CV モデルでは、すべての言語において「音節」という概念は使わず、構成素 C と V の配列とその隣接性 (lateral relation/adjacency) からアウトプットを導き出す。いわゆる子音連鎖に関しても、1) 枝分かれする語頭子音、2) 音節末・語末にあらわれる「コーダ」子音もそれぞれの音がすべて、独自の CV 構造を持つ。CV モデルでは徹底して CV の配列であるので x-slot 音韻

論では子音の結びつく付く O (onset (オンセット)) と通常母音の結びつく N (nucleus (核点))、そしてコーダ子音の結びつく R (rhyme (ライム)) の構成素層は CV 層に集約される。

日本語には高母音無声化が起こるなど特殊な場合を除きいわゆる子音連鎖がなく、子音で終わる語はないのだが、例えば英語のように音声的に語末に子音があるものでは、語末の V は空である。それぞれの V は空でありうるということは標準統率音韻論では特に語末の V が認可されているという考えが根底にあったが、CV モデルでは語頭の枝分かれオンセットを含めて、すべての位置において V が認可される可能性を持っている (Scheer 2004, 2012, Cyran 2011)。

### 3.2. エレメント [ɪ] のステータスについて

本稿では母音 /i/ の消失と弱化が問われている。エレメント [ɪ] は単体で V に結び付くと母音の /i/ と音声解釈されるが、C に結び付くと /j/ の音声解釈がされる (Kaye 1989, Lowenstamm 1996, 2000, Yoshida 1989)。

日本語の重子音は空の V を C が挟んだ表示を取る。アクセント位置の予測は「空の N 点」がカウントされていること (Yoshida 1999) などから空の N が O に囲まれる表記が支持されている。Yoshida (1999) の分析から O を C に、N を V に読み替える。例えば長めの外来語のアクセントが後ろから三番目の CV に、例えば(「'」でアクセント核を表す)「オーストリア」、「オーストラリア」のように付与される際に、重子音はこの CV のカウントに含まれる。「カルカッタ」「ハスカップ」のように重子音を含めて後ろから三番目の CV に付与される。

統率音韻論の理論の中で注目すべきは音韻表示の中で /i/ と /j/ が同一のエレメントであり、連結される点がどの構成素と結びついているかによって表象しているものが異なるということである。[ɪ] が V に結び付くと /i/ と音声解釈され、C に連結すると /j/ と解釈される。重要なことは、複合動詞「動詞-よる」の二つの動詞間の複合要素 /i/ は独自の CV 構造を持つことである。活用形によって同個所(動詞 1 語幹末尾)に起こる母音が異なることは見たが、このいわゆる連用形末尾の /i/ に関しては、独自の CV 構造を持つ

た /i/ が想定される。

### 3.3. 韻律接中辞

強調の仕方として韻律を挿入する過程（那須 2004）が起こっていると仮定する。その後の分析は那須（2004）で提唱されている、撥音や促音として表出する韻律接中辞の  $\mu$ （モーラ）の挿入という分析からは異なり、CV スロットの投入という分析である。まず、統率音韻論においては、他のフット、音節、モーラなどの構成素は存在しない。この条件下で挿入されるものは韻律情報を持った CV ということになる。韻律情報はストレスにせよ、ピッチにせよ、アクセント言語においては、その与えられた音韻領域の統率主であるので、ここで挿入される CV は生来的な統率主ということになる。

形態的・統率的情報に基づいて、長音化を含む分節音量の操作が起こるとき、音韻的には「音節」の周辺への結合が見られる（Lombardi and McCarthy 1991）。那須（2004）では「接中辞を伴う語形成において汎言語的に観察される効果」として左接性（Left-edge proximity）、すなわち、できる限り領域の左端近くに位置する音節の直前か直後のどちらかに、韻律モーラが挿入される（Lombardi and McCarthy 1991）と論じている。同様に、CV モデルにおいては、言語普遍の観点から、形態素ではなく「接辞 CV」を挿入する言語の例としてレゴボ語などが挙げられている（Ulfsbjorninn, 2017）。言語により、この接辞 CV がベースに付着する位置は異なるが、局所性を守るため、ベースに最も近い位置に付着する。京都方言では強調の CV がベース、すなわち本稿では複合動詞形の動詞 1 の直後に挿入されると分析する。

### 3.4. CV モデルと $\text{II}$ エLEMENT —チャハ語の例から

Lowenstamm（1996, 2000）ではセム語属チャハ語の二人称女性単数形である  $\text{II}$  を浮遊音として分析し、語彙指定のある母音として現れる場合にも、口蓋化として現れる場合にも常に独自の CV 構造を有している。二人称女性形を表す  $\text{II}$  は付属する動詞の活用によって表出する位置と形が異なり、そのあらわれる位置によって、例えば語末では語末尾子音を口蓋化するという形で（11b）、語中では長母音 /i:/ として現れる（11d）のが説明できる。

McCarthy (1983) において提唱された浮遊する形態素 (10a) に啓発された分析で、この浮遊する I に独自の CV 構造を持たせている (Lowenstamm 2000) (10b)。

- (10) a. 
$$\begin{array}{c} \text{I} \\ [+fem.] \\ \text{CVCVCV} \end{array}$$
 b. 
$$\begin{array}{c} \leftarrow \text{I} \\ +\text{CV} \\ [+fem.] \\ \text{CVCVCV} \end{array}$$

男性形 (11a) では語末の子音が /t/ で、女性形 (11 b) の語末子音は口蓋化している。チャハ語の /i/ は長母音で /i/ は短母音 (Lowenstamm 2000) であり、独自の CV 構造を想定することにより、女性形 [kitif] (11d) は相対する男性形 (11c) より 1CV 分、長くなり、長音化することが説明できる。

- (11) a. 
$$\begin{array}{c} \text{k} \quad \text{f} \quad \text{t} \\ | \quad | \quad | \\ \text{CVCVCV} \\ \text{1} \quad \text{2} \quad \text{3} \\ [\text{kift}] \\ \text{'open (masc.)'} \end{array}$$
 b. 
$$\begin{array}{c} \text{k} \quad \text{f} \quad \text{t} \quad \text{I} \\ | \quad | \quad | \quad | \\ \text{CVCVCVCV} \\ \text{1} \quad \text{2} \quad \text{3} \quad \text{4} \\ [\text{kifc}] \\ \text{'open (fem.)'} \end{array}$$
- c. 
$$\begin{array}{c} \text{k} \quad \text{t} \quad \text{f} \\ | \quad | \quad | \\ \text{CVCVCV} \\ \text{1} \quad \text{2} \quad \text{3} \\ [\text{kitif}] \\ \text{'chop meat (masc.)'} \end{array}$$
 d. 
$$\begin{array}{c} \text{k} \quad \text{t} \quad \text{I} \quad \text{f} \\ | \quad | \quad / \quad \backslash \quad | \\ \text{CVCVCVCV} \\ \text{1} \quad \text{2} \quad \text{3} \quad \text{4} \\ [\text{kitif}] \\ \text{'chop meat (fem.)'} \end{array}$$

(11b) の表示は 4 番目の CV に浮遊する V に I が結びつく音韻表示を口蓋化として音声解釈するものである。

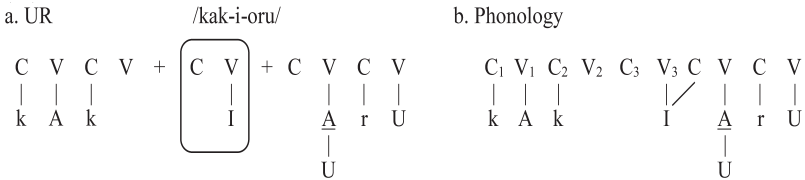
同様に、京都方言の「動詞-よる」の複合動詞間に見られる複合要素 /-i-/ もエレメント II に対して CV 構造を持つ。強調の CV との関わりによって現れるピッチ・アクセント型も交えて考察を進める。

#### 4. CV モデルと京都方言複合動詞における II

##### 4.1. 統率主 I

「動詞語幹-い-おる」という基底形から口蓋化、重子音化の過程を説明する。共時的には既に「よる」で定着しているとはいえ、「おる」から「よる」が形成された過程は以下のような表示である。この「-い-」は複合要素 (McCawley 1968) としている。/kak-i-oru/ (書きおる) から [kakijoru] (書きよる) への派生を表示する。

(12)



この表示 (12b) は [kakijoru] という音声解釈を受ける。V<sub>2</sub>C<sub>3</sub> (12b) が余分に見えるかもしれないが、この音韻表示を以って「書きよる」から「かっきよる」に至る音声解釈を説明できる鍵となる。

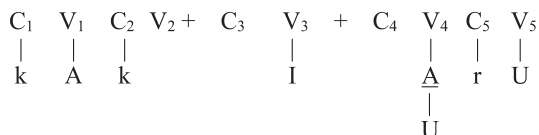
重子音は CVCV の二つの C を占める。言語普遍として必ずどの言語においても CV の組み合わせでスケレトンが並ぶ。いわゆる開音節言語である日本語においても空の V が存在することは Yoshida (1989, 1995) で既に報告されているが、3.2. でも述べたとおり、Yoshida (1989, 1995) の分析は Onset - Nucleus (ON) ペアを用いているので ON を CV に読み替える必要がある。統率音韻論で提唱されている空の範疇 (Empty Category) は語中では認可、もしくは統率された核点において音声解釈がされないものを指す。日本語において空の V が起こり得るのは、日本語共通語の無声化高母音 (4.2) など特殊な場合だが、重子音はそのひとつであり、二つの C に囲まれる空の V という構造を持つ。

まず、チャハ語の例に見たように、京都方言では動詞の複合系の連結の /-い-/ は II エレメントが挿入されるときに CV の V に連結されて挿入される。(13) では C<sub>3</sub>V<sub>3</sub> がその挿入された CV であり、音韻表現、II と連結され

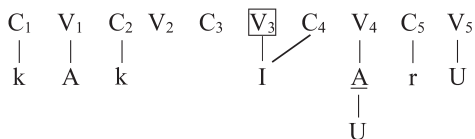
ている。ピッチ型から判断すると、[kakijoru] (13b) の V<sub>3</sub> にアクセントがあることからこの V が複合動詞全体の統率主となっている。(すべての II エレメントが統率主にならないといけないということではなく、もちろん、他のエレメントを従える V も統率主になり得る。)

(13) 書きよる (かっきよる) [kakkjoru] の場合

a. Underlying Representation (UR) /kak-i-or-u/



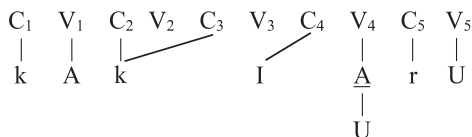
b. Phonology



[kakkijoru]

音韻表示 (14) は重子音形が起こる場合である。V<sub>3</sub> から II は連結が解除される。

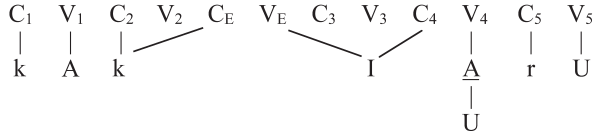
(14) [kakkjoru] / ?[kakkjoru]



音韻表示 (14) で重子音形が起こる場合を表現できるが、このままだと山  
口方言形の [kakkjoru] という音声解釈になり、京都方言の重子音形との区別  
はつけられない。V<sub>3</sub> の II は C<sub>4</sub> と連結し、口蓋化が表される。しかしこの  
形はあくまで [kakkjoru] であり、京都方言に起こる [kakkjoru] ではない。  
ここで考慮すべきは京都方言における動詞 1 部分、すなわちベースの、末尾

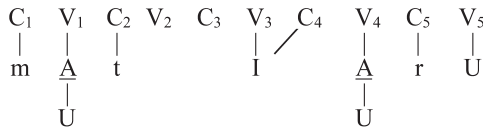
子音の重子音形は強調形だということである。便宜のため E のタグをつけ、強調 (emphasis (E)) の CV であることを示すために付記する。C<sub>E</sub>V<sub>E</sub> がベースの最も近いところに挿入される (15)。

(15) 京都 (強調) [kakkɔ̃ʝoru] の場合

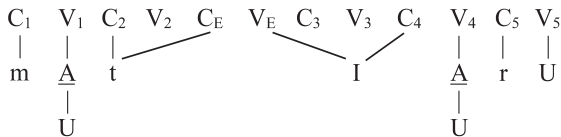


「持ちよる」[mottɕɔ̃ʝoru] でも同様な音韻表示から音声解釈がなされる。京都方言を含む日本語においては /s/、/t/、/h/ は CV 構造を持つ [ɰ] に隣接するとチャハ語の例と同様、音声解釈として口蓋化する。以下 (16)、音声解釈の表示である。他方言のはっきりと拗音の認められる「もっちよる」の形は (16c) の音声解釈で、京都方言特有の拗音 + 更なる口蓋音化 [ɰ] [mottɕɔ̃ʝoru] の音声解釈は (16b) のようになる。

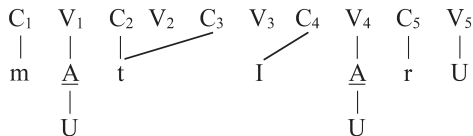
(16) a. [moteɰjoru]



b. 京都方言 [mottɕɔ̃ʝoru]



c. 京都では起こらない形 山口方言形 [mottɕɔ̃ʝoru]





京都方言の [mottɕʲoru] が印象として [mottɕoru] より [ʲ] の分、いささか長いのは、強調の CV のためと考えられる。

このように高母音から口蓋化が起こる環境が表示される。複合形になるなり、接尾要素が付くことで同様に入手可能な C がありながら、例えば否定形 /mot-aN/ (持たん) のように、ほかの活用形においては重子音化が起こらないのは、|A| エレメントは、少なくとも日本語では C のスロットと結合することではなく、|I| とは異なり |A| の渡り音はなく、すなわち |A| が C に連結することはない。なので接尾部分の口蓋化という揺らぎがない状態とどまる。重子音化が起こらない場合、語幹と接尾辞間に残る余剰分の VC は解釈されない。

(17)<sup>3</sup>

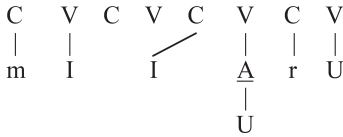
a.	C	V	C	V	+	C	V	C	V
	m	A	t			A	N	U	

他の活用形では複合音韻表現 |A・U| (/o/) なども C のスロットと結合することはないので |A| エレメントの時と同様、重子音化を誘発しないと考える。

単一 CV から成る動詞 1 を持つ複合動詞、「見よる」が「みよおる」という形になることにも |I| エレメントの CV と融和する性質が反映されている。単一 CV のものは「寝よる」の例のように発音のバリエーションがない。レグボ語のように語頭の子音を重子音にすること (Ulfsbjorninn 2017) は京都方言では起こらず、ベースの形は保持される。しかし、単一 CV からなるベース (動詞 1) 語幹末尾が /i/ の場合には動詞 2 の母音が長くなっている。|I| は連結するスケレトンによって母音 /i/ (V) でも子音 /j/ (C) にもなりうることから、重子音としては音声具現化しにくいのが原因であろう。隣接する同じエレメント (この場合 |I|) を回避するために Obligatory Contour Principle (Leben 1973) により、連続する同一の項目は一領域において一つに集約される。[mi-i-joru] とはならず、[mjooru] となる (18c)。それに対して語幹の母音が /e/ の場合には連結の /-i-/ との間に OCP は適用されず、[nejoru] となり、\*[njooru] になることはない。

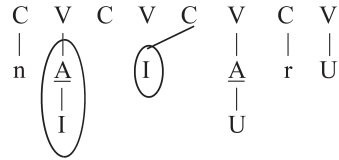
(18)

a. 非強調形 /mi-/



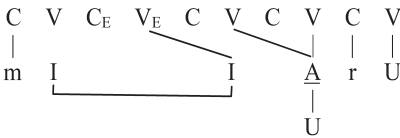
[mjooru]

b. 非強調形 /ne-/



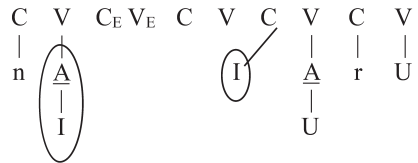
[nejuuru] \*[njooru]

c. 強調形



[mjooru]

d.



[nejuuru] \*[njooru]

II エレメントはCにもVにも連結することがあるので、重子音化という形では現れない。また、京都方言では語頭には重子音が生じないので、この例には重子音化する子音がない。

京都方言の重子音は他の西日本の同様な重子音と異なって聞こえるのか、強調形ということがどのようにかかわってくるのか、ピッチに鍵があるかもしれないので、更にピッチ型を考察する。

#### 4.2. ピッチに表出する統率主

重子音化、口蓋化には語幹のアクセント式が問われず、高起式 (19) であれ、低起式 (20) であれ、同様に重子音化、口蓋化が見られる。京都方言動詞句のアクセントは後続接尾辞によって決定されている (Yoshida & Zamma 2001) が、複合動詞ではどうだろうか。アクセント核の位置を観察する。複合動詞のピッチ型を精査すると、アクセント核があるのは、この /-i-/ であることがわかる。ピッチの上昇は [ ] で表し、ピッチの下降は [ ] で表す。[ ] をつけないながらも、音声表記で記すことにする。

(19) 高起式の動詞の場合

動詞 1 終止形	複合形	
	A) 重子音・ 口蓋音化なし	B) 重子音・口蓋音化あり
a. [saku] (咲く)	[saki] joru	[sakkʲo] ru ~ [sa] kkʲoru
b. [dekiru] (できる)	[deki] joru	[dekkʲo] ru ~ [de] kkʲoru
c. [kasu] (貸す)	[kaçi] joru	[kaccʲo] ru ~ [ka] ccʲoru
d. [sasû] (させる)	[saçi] joru	[saccʲo] ru ~ [sa] ccʲoru
e. [ketçi] (けちる)	[ketçiri] joru	[ketçirʲo] ru ~ [ketçi] rrʲoru
f. [haçiru] (走る)	[haçiri] joru	[haçirʲo] ru ~ [haçi] rrʲoru
g. [inu] (いぬ)	[ini] joru	[innʲo] ru ~ [i] nnʲoru
h. [tatamu] (たたむ)	[tatami] joru	[tatammʲo] ru ~ [tata] mmʲoru
i. [kooru] (凍る)	[koori] joru	[koorrʲo] ru ~ [koo] rrʲoru

(20) 低起式の動詞の場合

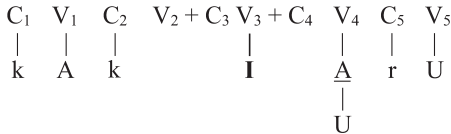
動詞 1 終止形	複合形	
	A) 重子音・ 口蓋音化なし	B) 重子音・口蓋音化あり
a. ka [ku] (書く)	ka [ki] joru	kak [kʲo] ru
b. sa [su] (刺す)	sa [çi] joru	sac [çʲo] ru
c. ki [ru] (切る)	ki [ri] joru	kir [rʲo] ru
d. tsuku [ru] (作る)	tsuku [ri] joru	tsu [ku] rrʲoru
e. otei [ru] (落ちる)	o [tei] joru	ot [tçʲo] ru
f. ka [mu] (噛む)	ka [mi] joru	kam [mʲo] ru
g. ka [ŋu] (嗅ぐ)	ka [ŋi] joru	kaŋ [ŋʲo] ru

重子音化・口蓋音化の起こらない場合を示す A 列には高起式、低起式ともに、すべての例においてアクセント核は複合要素の /-i-/ にある。高起式のものにおいてはアクセント核の位置が重子音拍の一つ左にずれるパターン<sup>4</sup>が B 列 (19h, i) にもありながら、低起式のデータ (20) においては B 列の (20d) 以外、口蓋化した拍にアクセント核の位置が固定している。

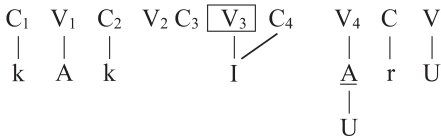
アクセント核を持つ V は、そのプロソディ領域の統率主であり、領域内での隣接する分節音間の統率・認可関係においても主部となることが条件である (Yoshida 1999)。複合要素 /-i-/ に関しては、強調の CV と並んで挿入され、強調の CV 自体には音韻表現が伴わないために複合要素にアクセントを保つことになり、プロソディ領域の主の候補となることがわかる。

(21) [´] と  $\boxed{V}$  でアクセント位置を示す

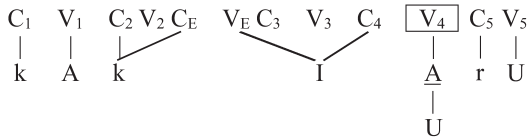
a. UR /kak-i-oru/



b. [kakijoru]



c. [kakkj'oru]



表示 (21c) に示されるよう、口蓋化 (II) が C<sub>4</sub> にリンクするとともにアクセントが V<sub>4</sub> に移る。これは統率主である II が口蓋化によって波及した C<sub>4</sub>V<sub>4</sub> に力を及ぼすためと考える。

日本語に空の V が起こると考えられる他の音韻過程の可能性は、共通語や関東の方言に起こる高母音の無声母音化であり、京都方言はじめ、関西方言ではあまり起こらない現象である。この無声化のターゲットとなる高母音を挟む、もしくは隣接する子音が無声であることが条件であるため、ポーランド語のように 2 つの C 間の infragovernment (Cyran 2010) の可能性も考

えられる。

Ⅱに主部性があると断言する前に、ほかの母音、もしくは子音で同様な現象が起こっていないか検討する必要がある。

## 5. 京都方言における他の重子音

### 5.1. 動詞の終止形と断定の助詞「わ」/wa/

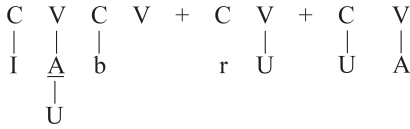
後舌高母音 /u/ は京都方言は他の関西方言と同じように、共通語や東日本の非円唇 [u] と比べて円唇性のある [u] である。前舌母音ほどの頻度では見られないが、/u/ と口唇接近音が並ぶ場合にも同様な現象が見られる。例えば、断定の助詞、「わ」が終止形の動詞に後続するとき、少し微妙な重子音化と /u/ 母音の接近音化（たまに消失）が起こる。接近音は日本語には二種類あり、一つはここまで検討してきている /j/ であり、もう一つは /u/ の母音と近い /w/ である。動詞の語幹末の子音ごとに例を見てみよう。

- |      |        |      |           |             |                         |
|------|--------|------|-----------|-------------|-------------------------|
| (22) | a. /k/ | kak- | [kakuwa]  | (書くわ)       | [kakk <sup>w</sup> wa]  |
|      | b. /ŋ/ | kaŋ- | [kaŋuwa]  | (嗅ぐわ)       | [kaŋŋ <sup>w</sup> wa]  |
|      | c. /s/ | kas- | [kasuwa]  | (貸すわ)       | [kass <sup>w</sup> wa]  |
|      | d. /t/ | mat- | [matsuwa] | (待つわ)       | [matts <sup>w</sup> wa] |
|      | e. /n/ | in-  | [inuwa]   | (いぬわ ‘帰るわ’) | [inn <sup>w</sup> wa]   |
|      | f. /m/ | jom- | [jomuwa]  | (読むわ)       | [jomm <sup>w</sup> wa]  |
|      | g. /r/ | kir- | [kiruwa]  | (切るわ)       | [kirr <sup>w</sup> wa]  |
|      | h. /b/ | job- | [jobuwa]  | (呼ぶわ)       | [jobb <sup>w</sup> wa]  |

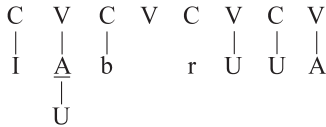
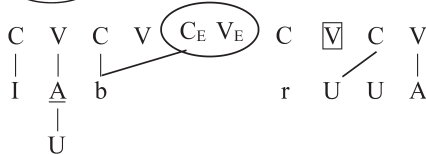
ここまで、議論の的を絞るために第二動詞の終止形を形態論なしで /-oru/ と表示してきている。前述のとおり、おる /oru/ はもちろんこれ自体活用があり、/or-ru/ から派生された /or-/ の終止形 / 非過去形 /or-u/ である。動詞終止形の末尾、後舌高母音 /u/ に断定の助詞の頭子音、口唇接近音 /w/ が隣接する。統率音韻論エレメント理論では同一エレメント [U] がそれぞれ、/u/ は V に連結されたもの、/w/ は C に繋がるものである。動詞 1 の語幹末尾子音があるので終止形接尾辞 /-ru/ の /r/ は解釈されなくなる。

(23)

a. /job-wa/ の UR



b. [jobuwa]

c. 強調の (C<sub>E</sub> V<sub>E</sub>) の挿入

[U]も [I]と同様にCにもVにも繋がるエレメントであり、拍（モーラ）の挿入では説明のつかない口蓋化や口唇化が解明される。口唇化 [ʷ] が起こり、[yobb<sup>w</sup>wa] という「曖昧な」発音が起こる。日本語の合拗音「くわ、ぐわ」は共時的には消滅しているが、京都方言では1980年代には年配には使われていた「書っくわ」における [kakk<sup>w</sup>wa] の音はまさに合拗音<sup>5</sup>である。ただし、京都方言では [b<sup>w</sup>a] や [tts<sup>w</sup>a] など、軟口蓋閉鎖音以外の音にも生じる。このような子音のようなステータスとなっても強調のCVが挿入されているため、アクセントは [ʷ] 部分にあるように聞こえている。

[U]と [I]の非対称性は様々な形で現れている。京都方言では例えば「聞きますわ」というように使用する「～ますわ」が [masswa]～[mass<sup>w</sup>wa] という接近音、そしてさらに明確に /u/ 母音も /w/ 接近音も消失してしまう形もよく使われる。すなわち「～まっさ」という形で、「ほな、いってきまっさ」（そしたら、行って来ますよ）というふうに使われる。[I]エレメントの

場合は消えてしまうことはあまりないが、|U| エレメントは重子音化に伴って消えてしまうこともある。借用語への挿入母音が特殊な環境を除いて /u/ (Tateishi 1990)<sup>3</sup> であり、例えば英語の *ham* には [hamu] (ハム)、*cup* には [kappu] (カップ) と語末に挿入母音 /u/ が観察されるので、|U| エレメントは京都方言以外の日本語の変種においても浮遊の母音としての役割も持っている (Yoshida 2003, 吉田 2019)。

いずれにせよ、エレメント |I| と |U| が、元々 V と連結していた (高母音) のに強調の要素が入ることにより C に連結して渡り音となることが複合動詞の動詞 1 の末尾の子音を重子音化させていることは確かである。

## 5.2. 名詞に現れる重子音

名詞においても重子音化はよく見られ、多くは口蓋化を伴う。京都方言では共通語など他の方言と対照すると特異な重子音が見られ、複合動詞の重子音化と同様の環境下で起こるものが多いが、他の音韻過程や、音声的条件を伴うもの (24e,d) もあるので、ここには代表的なものだけ例として挙げておく。

- |                        |                                       |
|------------------------|---------------------------------------|
| (24) a. トシヨリ〜トツシヨリ(年寄) | [toɕijori] ~ [toɕɕʰjori] ~ [toɕɕjori] |
| b. ニチヨ〜ニツチヨ(日曜(日))     | [nitɕijo:] ~ [nitteʰjo]               |
| c. オジヤ〜オツジヤ(雑炊)        | [odzija] ~ [oddzʰja]                  |
| d. スキヤキ〜スツキヤキ(すき焼き)    | [sukijaki] ~ [sukkʰjaki]              |
| e. カツオ〜カツツオ(鰹)         | [katsuo] ~ [kattso]                   |
| f. ゴチソー〜ゴツツオ(ご馳走)      | [gotɕiso:] ~ [gottso]                 |

例えば (24a) 「とっしより」は国立国語研究所のデータベース、方言録音資料シリーズ 11「京都市方言」(61: 1969) において 1910 ~ 1920 年生まれの「はえぬき」の女性の発話でも記録されている。[toɕɕʰjori] ~ [toɕɕori] と発音される。

前述のとおり、名詞における重子音化を見ると、やはり口蓋化との共起が観察される。共通語とは対照的に「オツジヤ」(24c) に見られるように有声子音のこともある。

このような文末表現や名詞の重子音の例からも支持されるように、CV モデルにおいて基底構造が決まればそのままの CV 構造を、派生を通して保つこととなる。名詞においても、もともとの形に強調が入り、|I| エLEMENT が並列する /i/ と /j/ の -VC-、もしくは |U| エLEMENT が並列する /u/ と /w/ の -VC- があるとき、このような同一ELEMENT と連結した -VC- が口蓋化・口唇化を起こし、その結果、その前にある子音の重子音化が起こる。もちろん、歴史的に重子音化した語彙レベルでの操作、例えば薬缶から転じてヤッカとなる例などもあるが、ここでは説明を割愛したい。

## 6. 結語

本稿では京都方言の複合動詞表現に現れる重子音化を、主にどのような背景でこの現象が現れるのかを解明する目的で検討した。言語の普遍性を追求するELEMENT理論・CVモデルを想定し、基底表示に隣接する音韻表現の条件で可能な音韻過程が表現され、そこでの可能な音声解釈から異形が導き出されることを示した。重子音化が起こる下地は基底表示にあり、音節構造が変わるわけではなく、CV層と音韻表現の層の連結が音韻操作されることによって発音のバラエティが導き出されることを示した。今後、CVモデルにおける統率関係の更なる究明を進めたい。

## 注

- 1 本稿執筆にあたって貴重なご指摘、ご指南を頂いた匿名査読者様に、CVモデルに関する相談には Shanti Ulfsbjorninn 氏に、そして本稿作成の様々な段階で貴重なご助言をくださった言語・音韻論関連の学会の先生方に心からの感謝を申し上げたい。残る不備は勿論、著者の責任である。本研究は科学研究費基盤研究 (C) (一般) の助成を受けている。
- 2 「-おる」の終止形は本来ならば /-or-u/ と示されなければならないが、現議論から注意がそれないように便宜上 /-oru/ という表記にしておく。
- 3 撥音の構造に関しては本稿の分析の範囲を超えるので、Yoshida (1999) では ON ペアで表記されているが、O を C に、N を V にして CV ペアに変えて表記する。(17) の表記の N は nasal element である。
- 4 例えば「さしよる」には高起式の「さしよる」と低起式「刺しよる」の区別を保つためか、高起式のピッチ型に頭高のバラエティがあることは個別に調



査が必要である。

- 5 現在は共通語から合拗音は消失し、京都方言の「くわ、ぐわ」もほぼ、聞かれなくなっている。

## 参考文献

- Charette, Monik and Asli Göksel (1996) Vowel harmony and switching in Turkic languages. In: Eugeniusz Cyran(ed.) *A Festschrift for Edmund Gussmann*. 29-57, PASE Studies and Monographs.
- Cyran, Eugeniusz (2010) *Complexity scales and licensing in phonology*. Studies in generative grammar/eds, Jan Koster, Henk van Riemsdijk, 105. De Gruyter Mouton.
- Faust, Noam, Nicola Lampitelli and Shanti Ulfbsbjorninn (2018) Articles of Italian unite! Italian definite articles without allomorphy. *Canadian Journal of Linguistics/Revue Canadienne de linguistique* 63(3) : 359-385.
- Harris, John (1990) Segmental complexity and phonological government. *Phonology* 7(2) : 255-300.
- Harris, John and Geoff Lindsey (1995) The elements of phonological representation. In: Jacques Durand and Francis Katamba(eds.) *Frontiers of Phonology*, 34-79. Longman.
- Hayes, Bruce (1989) Compensatory lengthening in Moraic Phonology. *Linguistic Inquiry* 20: 253-306.
- 堀井令以知 (1975) 『京都語辞典』. 東京堂出版.
- Ito, Junko (1986) *Syllable theory in prosodic phonology*. PhD dissertation, University of Massachusetts.
- 影山太郎 (2013) 複合動詞レキシコン. <https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/> [2021年10月アクセス]
- Kaye, Jonathan (1995) Derivations and interfaces. In: Jacques Durand and Francis Katamba(eds.) *Frontiers of Phonology*, 289-332. Longman.
- Kaye, Jonathan, Jean Lowenstamm and Jean-Roger Vergnaud (1985) The internal structure of phonological representations: a theory of charm and government. *Phonology Yearbook* 2: 305-328.
- Kaye, Jonathan, Jean Lowenstamm and Jean-Roger Vergnaud (1990) Constituent structure and government in phonology. *Phonology* 7(2) : 193-231.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房.

- 国立国語研究所 (1969) 『方言録音資料シリーズ』 11, 京都市方言.  
[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon\\_siryu/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon_siryu/) [2021年10月アクセス]
- Leben, William (1973) *Suprasegmental phonology*. Indiana University Linguistics Club.
- Lombardi, Linda and John McCarthy (1991) Prosodic circumscription in Choctaw morphology. *Phonology* 8, 37-72.
- Lowenstamm, Jean (1996) CV as the only syllable type. In: Jacques Durand and Bernard Laks(eds.) *Current trends in phonology: models and methods*, 419-442. European Studies Research Institute, University of Salford.
- Lowenstamm, Jean (2000) The no straddling effect and its interpretation – A formal property of Chaha 2<sup>nd</sup> feminine singular formation. In: Jacqueline Lecarme, Jean Lowenstamm and Ur Shlonsky(eds.) *Research in Afroasiatic Grammar*, Amsterdam: 183-198. John Benjamins.
- Lowenstamm, Jean (2010) Derivational affixes as roots (Phasal Spellout meets English stress shift). Ms., LLF.
- McCarthy, John J. (1983) Consonantal morphology in the Chaha verb”. *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics*. 32, 176-188.
- McCawley (1968) *The Phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 中井幸比古 (1997a) 「I 総論」平山輝男 (編) 『京都府のことば』 1-26. 明治書院.
- 中井幸比古 (1997b) 「II 府下各地の方言, 京都市方言」平山輝男 (編) 『京都府のことば』 28-39. 明治書院.
- 那須昭夫 (2004) 「韻律接中辞と左接性 —日本語オノマトへの強調語形成—」『日本語と日本文学』 38. 筑波大学国語国文学会.
- 奥村三雄 (1962) 「京都府方言」榎垣実 (編) 『近畿方言の総合的研究』三省堂.
- Scheer, Tobias (2004) *A lateral theory of phonology : what is CVCV, and why should it be?* Studies in generative grammar/editors, Jan Koster, Henk van Riemsdijk, 68.1. Mouton de Gruyter.
- Scheer, Tobias (2012) *Direct Interface and one-channel translation : a non-diacritic theory of the morphosyntax-phonology interface*. Studies in generative grammar/editors, Jan Koster, Henk van Riemsdijk, 68.2. Mouton de Gruyter.
- Tateishi, Koichi (1990) Phonology of Sino-Japanese morphemes. *University of*

- Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 13: 209–235. Amherst, MA.
- Shanti Ulfsbjorninn (2021) Labiovelars and the labial-velar hypothesis: Phonological headedness in Bare Element Geometry. *Glossa: a journal of general linguistics* 6(1). doi: <https://doi.org/10.16995/glossa.5718>
- Shanti Ulfsbjorninn (2017) Item-and-arrangement morpho-phonology: Non-templatic, non-concatenative morphology in Strict CV. *Atelier de Phonologie, Paris VIII*.
- Yoshida, Yuko (1989) *Phonological analysis – structure of a geminate in the Kyoto dialect of Japanese*. MA dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Yoshida, Yuko (1999) *On pitch accent phenomena in Standard Japanese*. School of Oriental and African Studies(1995), *Dissertations in Linguistics*, 1. The Hague: Holland Academic Graphics.
- Yoshida, Yuko Z. (2003) Licensing constraint to let. In: Stefan Ploch(ed.) *Living on the edge: Festschrift for Jonathan Kaye*. 447–464. Mouton de Gruyter.
- Yoshida, Yuko Z. (2009) Projection of licensing potency from a phonological expression. In: Kuniya Nasukawa and Phillip Backley(eds.) *Strength Relations in Phonology*. 373–389. Mouton de Gruyter.
- Yoshida, Yuko Z. (2011) Review of *the Syntax of sentential stress* by Arsalan Kahnemuyipour (2009) Oxford University Press. In *English Linguistics* 28(2) : 301–308.
- Yoshida, Yuko Z. and Hideki Zamma (2001) The accent system of the Kyoto dialect of Japanese – A study on phrasal patterns and paradigms. In: Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara(eds.) *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, 223–249. Mouton de Gruyter.
- 吉田優子 (2013) 「2 モーラ和語のアクセントと無声化母音」『コミュニカーレ』2: 21–41. グローバル・コミュニケーション学会、同志社大学.
- 吉田優子 (2019) 「大阪・京都方言における撥音とピッチ・アクセント」*KLS Selected Papers* 1: 185–197. 関西言語学会.

## Geminate Consonants and high vowels — glide alternations in the Kyoto Dialect of Japanese

Yuko Z. YOSHIDA

**Keywords:** the Kyoto Dialect, geminates, high vowels and glides, compound verbs, emphatic element

### Abstract

In the Kyoto dialect, the interaction between gemination and palatalization observed in the compound-verbs involves the insertion of a CV for emphasis, which results in a slightly longer geminate. This represents the stem-final consonant of the initial member of a compound verb. A similar combination of gemination and palatalization appears in other Western Japanese dialects, although the palatalized consonant is less palatal in Kyoto, while at the same time, its durational component is longer. Combinations of gemination and labialization lend support to the analysis within the Element Theory: both cases involve elements which occur both at C and V slots, resulting in a glide and a high vowel respectively. Another noteworthy feature of the Kyoto dialect gemination is that it also accommodates voiced-consonant geminates, not just common voiceless consonants noted in most Japanese varieties. This paper also documents the pitch patterns of such geminated forms of compound verbs.